
x 不良少女の恋 x

狼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

× 不良少女の恋 ×

【Nコード】

N2529E

【作者名】

狼

【あらすじ】

不良界で有名な淋。恋を全くした事が無かったが悠に出会い、初めて恋をする。でも淋は悠に不良界の事を話せずにいた。一方、悠も淋を好きになっていたのだが、悠にも大きな秘密があった・・・

第1章 　　＼淋side＼

「淋）ねみいゝ・・・」

オレは、モリサキ森咲 リン淋。

今日から高校1年。

オレはこうみえても、一樣女だ。

ガキのころから男とばっかつるんできたし、母親がいねえから男っぽくなっただと思う。

あ、それとオレは、世界NO.1の『刹那』という族の総長をして不良界では >狼ウルフくつてよばれてる。毎回不良に絡まれるのはめんどいから、このことは隠している。でもたまにオレらの正体に気づくやつがいるから、オレは不良がいらないような普通の高校に入學した。勉強はできる方だから簡単に入學できた。

「洵）お、淋、発見。やつぱ屋上にいたか。てか淋、ドアのカギぶちこわしたのか？壊れてるのが落ちてた。」

「淋）ああ。開かなかったから」

この男は、香原 カハラジュン洵。オレの親友で『刹那』の副総長。>騎士くつてよばれてる。

「洵）つか、始業式いかねえの？入学式もサボったじゃん。」

「淋）だりいじゃん。別に出なくても入學できるだろ。」

「洵）ま、そりゃそうだな。」

そういうと、洵はオレの横に来ていつしよにねころんだ。今の季節

は春。超良い天気。オレは春が好きだ。だから春にはよく屋上に来る。まあ、ほかの季節にもたまに来るケド。要するに、オレは屋上がお気に入り。

ガチャ・・・

「葵）ア、淋、洵、発見！始業式終わったよあ。クラス見に行こうよ。」

「淋）ヤダ。めんどい。」

この女は、空野 葵。ソラノアオイオレの親友で『刹那』の幹部をしている。

「葵）まア、そう言わずに行こうよ。ね？」

そう言つて、葵はオレと洵を無理やり起こした。

「洵）行こうぜ、淋。葵は1度言ったらきかねえんだし。」

「淋）ハア・・・、はいはい。」

ワイワイガヤガヤ・・・

うぜえ。クラス発表ぐれえで何でこんなに騒ぐんだよ。

「葵）あ、あつた！アタシ2組だア。淋と洵わ？」

「洵）俺も2組。」

「淋）2組。」

「葵）わあ！！みんな同じじゃん。ラッキー♪」

2組に行くと、黒板に席順が書かれていた。

「葵）えつと、席わぁ・・・、あつた！あ、スゴイ！みんな近いよ
お」

「洵）だな！」

確かにスゲエ。席は、オレが一番後ろで、洵がオレの横、葵がオレの
前。スゲエ偶然だな。

キンコンカンコン・・・

「淋）クラスも席も見たし、もおいいだろ？屋上もどる。」

「葵）ダメエ。もうちよつといよおよ！クラスのメンバーも見たい
し。」

そお言つと、葵はオレを椅子に座らせた。

「はい、皆、自分の席にすわりなさい。」

教室に入ってきた先校がそお言つと、立っていたやつらが一斉に席
に座った。

「今日から2組の担任をする藤崎だ。以後、よろしく。」

「淋）・・・たまり場行くわ。先校の話嫌いだから。」

「洵）俺も。」

「葵）ええ・・・。じゃあアタシも行こつと。」

「洵）つか、先校の話の途中だけど？」

「淋）そんなん関係ねえし。」

ガタツ・・・

オレらは席をたち、ドアへ向かった。

「オイ。君たち、どこへ行く気だ？待ちなさい！」

ガラッ・・

オレらはシカトしてドアを開けた。

「オイ！待ちなさい！」

先校はオレの腕をつかみ引き止めた。

「淋」さわんじゃねえよ！キモイんだよ　ハゲ！死ね　ボケ！」

オレは先校を殴り、手を振りはらってたまり場へ向かった。

「洵」今のはやばくねえか？退学になんぞ？」

「淋」別にいいよ。オレ、不良校でもかまわねえし。」

「葵」不良校かあ・・・それも面白そうだね！」

話してるうちに、たまり場についた。

「淋さん、洵さん、葵さん、おはようございます！」

「淋・洵・葵」おはあ」

『刹那』の下っ端のやつらがあいさつをしてくる。

「慎」淋、洵、葵、おはあ」

『刹那』でオレらと呼び捨てにするのは1人・・・
杉本　慎だ。スキモーションオレらの親友で、葵と幹部をしている。

「淋・洵・葵）慎、おはあー」

「洵）何か情報入ったか？」

「慎）今のところは何もねえ。つか、始業式行つてたんじゃねえの？」

「葵）行つたんだけどねえ、淋が 先校の話嫌い って言つたからサボつてきたんだあ」

「慎）そっか；」

「淋）全部オレのせいだよ？」

「葵）だって、そうじゃん。」

「淋）・・・」

「洵）つかさあ 淋、 オレ って言つてのやめたら？女なんだし。」

「淋）別にいいじゃん。誰にも迷惑かけてねえんだし。それに、オレ じゃないんだつたら、なんて言うんだよ？」

「洵） アタシ とか うち とか？」

「淋）きもいし。」

「葵）ええ！アタシは、 アタシ って言つてるよ？」

「淋）そういう意味じゃねえよ。オレが アタシ とか言つたらきもいってことだよ。」

「慎）そおか？淋には、合うと思うけどなあ・・・」

「洵・葵）うんうん。」

「淋）はあ？意味わかんねえ。 どつか族、潰しにいくぞ。」

「葵）淋って、イラついたらスグ、ケンカにはしるよね。」

「洵・慎）だな。」

「洵）つか、どこ潰しにいくんだよ？」

「淋）知らねえ。慎、決める。」

「慎）オレかよ！； ん・・・NO.3の『炎』でいんじゃない？」

オレらは、NO.3の『炎』のたまり場へ向かった。

パンツ・

勢いよくドアを開けると、『炎』が一斉にオレらを見た。

「何だコラー！『刹那』が何の用だ！俺ら『炎』が怖くなって頭でも下げに来たのかあ？」

『炎』の総長らしき男がそお言うと、他のやつらが笑い出した。

「淋」んなわけねえだろうが！ボケ！何でオレらが『炎』を怖がらなきゃいけないんだよ！バカか？
オレらは、テメエらを潰しに来てやったんだよ！クズ野郎！！」

オレがそお言うと、ケンカが始まった。

ドコッ バキッ ドスッ

鈍い音が響き渡る。そして・・、

「うつ・・」

「ぐっ・・。」

うめき声も。

ケンカが始まって約20分、決着がついた。

もちろん、オレら『刹那』が圧勝。数人ケガしてるけど、どうってことない。一方『炎』は全員スゴイケガをして倒れている。

「淋」ふ・・。弱スギ。逆に驚いたよ。よくもまあ、こんな力量でオレらを挑発したもんだ。頭おかしんじゃないの？ フフ・・」

「・・・クソツ!・・・うつ・・・」

『炎』の総長らしき男が言い放った。

オレらはその場を後にして、それぞれ家に帰った。

ガチャ・・・

「淋」ただいまあ。」

「唯」おかえりい。」

この男は、森咲 唯。^{モリサキユイ}オレの兄貴。唯にいつてよんでる。

唯にいても『牙』という族の総長で、>狩人^{ハンター}くってよばれてる。まあ、でも『牙』はNO.5だけどね。

それと、オレは唯にいと2人ぐらししてる。両親はいるっちゃいるけど、いつも仕事でよほどのことがない限り、家には帰ってこない。金は毎月、振り込まれてるから大丈夫。

「唯」ケンカしてきたア？」

唯にいがオレに付いてる返り血を見て言った。

「淋」ああ、してきたよ。NO.3の『炎』と。圧勝した。」

「唯」圧勝かよ・・・」

オレがそお言くと、唯にいは少しすねた。

妹に力で負けてるといふ事が唯にいは、いやらしい。

「淋」まあ、今回『炎』はマジ弱かったし、今弱ってるんじゃないの?唯にいても勝てるでしょ。」

「唯」そおか?・・・つか、その 唯にいても ってとこ、ちよいム

力つく・・・」

「淋」そういう意味じゃねえよ。唯にいいけるだろってことだよ。

「

唯にいは、1度すねたら1日中すねっぱなしだからオレは唯にいをなくさめる。

1日中兄貴がすねてると、こっちがイライラしてくるし。

「唯」・・・つかさあ、淋は女なんだからもつと女らしくなれよあ。

兄貴として言うけど。」

「淋」何？何で 兄貴として言うけど ってとこ強調すんの？つか、別に女だからって女らしくならなくてもいいじゃん。別に迷惑かけてるわけじゃないんだし。」

「唯」普通、女は女らしくしないとイケねえんだよ。それを俺は淋に兄貴として言うてあげたまでだ。」

「淋」じゃあオレは普通じゃなくていいよ。」

「唯」妹が普通じゃないとか兄貴としてショックだし。」

そのあと、オレと唯にいは1時間程ケンカした。

言い争いから最終的に暴力にかわって、オレが勝った。そりゃ、NO、1とNO、5じゃな。

オレが勝って兄貴はすねたけど、オレもムカついてたからなくさめてやらなかった。

ま、明日になったらすっかり元通りになってるだろ。いつもそうだし。

。次の日。

やっぱり兄貴は元に戻ってた。

「淋）行ってきます。」

「唯）行つてらっしゃい。」

唯にはオレよりも30分あとに家を出るからいつもオレが見送られる。

学校につくと、洵と葵はもお来てた。

「洵）淋、昨日の事、問題になつてゐるらしいぞ。」

「淋）ふう〜ん……。ま、別にいんじゃない？絶対この高校が良かったわけじゃねえし。」

「葵）ま、そうだね！ここの高校はつきり言つてつまないし。」

♪ピンポンパーンポン♪

「森咲さん、香原さん、空野さん、至急職員室に来てください。繰り返します……。」

「洵）お呼び出しだぜ。」

「葵）みたいだねえ」

職員室に入ると、ほとんどの先校が集まつて深刻な顔をして話していた。

「葵）すいません、きたんですけど。」

葵がオレらが来たという事に気づいていない先校に言うと、先校が一斉に振り返りオレらを見た。

「少し話がある。こちらに來なさい。」

校長がそお言つてオレらを校長室に案内した。

「・・・森咲さん、君が藤崎先生を殴ったというのは、本当かね？」

「淋）そうですか？」

「そうか・・・。実はな、藤崎先生が入院したんだ。腹の骨が折れたらしくてな・・・。」

「洵）淋、強く殴りスギ。」

洵がオレの耳元で言ってきたので、オレは 加減したけど。 と返した。

「それでな・・・その、君たちの処分についてなんだが今日、会議で決定する。良ければ自宅謹慎、悪ければ退学だ。」

「淋）ああ、オレたち退学でいいから。この学校おもしろくねえし。」

「葵）うんうん。退学にしてくださいさあ！アタシたち、こんなつまらない学校よりも、もっと面白そうな学校行きたいんで。」

「いや・・・しかし、まだ退学になるかは、分らん・・・。」

「洵）じゃあ、オレらから辞めますんで。」

「・・・しかし、君らの親はどう思うか・・・。」

「淋）いや、オレら自由だから。」

「・・・しかし、」

「淋）しかし、しかし、うっせーんだよ！オレらがそうするって言つてんだから黙っとけ！クソが！！」

オレらは、そおいったあと、校長室を出た。

今日は総会が無いのでオレの家に3人で向かった。

「淋）ただいま。」

「唯）おかえり。アレ、洵と葵じゃん。久しぶりい」

「洵・葵）久しぶりい。」

オレの家に洵と葵がよく遊びに来るので、唯にいと洵と葵は友達だ。

「洵）つか、高校どこ行くよ？」

「葵）んゝゝ、この際、不良校に行ってみたんだよねえ。じゃあゝゝあゝあの有名な不良校の、三舟とかでいんじゃない？」

「淋）ん。そこでいいじゃん。」

「唯）ん？三舟？！三舟にいく気？？」

リビングでくつろいで話していたオレらの中に唯にいが入ってきた。

「淋）別にいいだろ。」

「唯）三舟っていったら、いろんな族が集まる高校だぞ？大勢で組んで襲ってきたらどうするよ？淋。」

「淋）は？オレを誰だと思ってるわけ？」

「唯）ゝゝゝゝゝゝ。」

「葵）そうだよお！淋は世界NO.1の族『刹那』の総長の>狼^{ウルフ}くだよお？誰もかなうわけじゃないじゃんゝゝ」

「唯）ゝゝそおですねえゝゝ。」

唯にいは、すねちゃったけどオレはめんどかつたのでほつといた。

。次の日。

オレらは入学手続きのため、三舟に向かった。

洵が三舟にはもう連絡したらしい。

コンコンゝゝ

「洵」昨日連絡したものですけど。」

「ああ、入りなさい。」

「葵」アタシら何組？」

「え、ああ、森咲さんが1組、香原さんが2組、空野さんが3組だ。」

「葵」は？何でみんな同じクラスじゃないわけ？」

葵が3人とも同じクラスじゃないことに少しキレて、凄い殺気を出して校長に問いかけている。

葵はこういう事に関してはキレル。

「に、人数の関係で・・・」

校長がビクビクしながら答える。

「葵」アタシら3人とも同じクラスにしてくれない？」

「し、しかし、」

「葵」同じクラスにしろって言ってたんだよ！」

「わ、分かりました。。」

と、いうことで3人とも1組になった。

「洵」1組って何階？」

「に、2階です。」

「こ、校内の説明は？」

オレらが校長室を出ようとすると校長がビクつきながらオレらを引き止めて言った。

「淋）んなの、いらねえし。」

2階に行くと1番奥に1組があつた。

ガラッ・・

ドアを開けると一斉に1組のやつらがオレらを見た。
ザワザワと騒ぎ出す。

どうやら誰もオレらの正体に気づいていないようだ。

「葵）転入生でえす！よろしく。」

葵がそお言つたあと、オレらは3つ空いてる後ろの席に座つた。

「転入生だつて。」

「ケンカつええのかな？」

そんな会話が聞こえてくる。

「拓・毬・和）淋さん！洵さん！葵さん！」

「洵）おう。高校ここだったんだ。」

「拓・毬・和）はい！」

こいつらは、井上 イノウエタク 拓[♂]、神坂 カミサカマリ 毬[♀]、仲井 ナカイカズ 和[♂]、3人とも『刹那』の一員で、総長、副総長、幹部の次に強く、オレらは面倒なとき、ケンカとかこいつら3人に頼む。

「毬）他にもいるんですよ！」

「拓）『刹那』はここに全員いますよ！」

拓が小声でオレらに言ってきた。

「葵）え！そおなのお？知らなかったあ。知ってたら最初からここに来たのにねえ？淋。」

「淋）だな。」

オレらは、授業なんか無視して遊んでいるときのように話した。まあ、でも不良校なんだしこれが普通だろうけど。

♪キーンコーンカーンコーン♪

チャイムがなると同時に『刹那』以外の不良たちは教室を出て行った。

ここの不良校は授業は聞かなくてもチャイム、つまり時間を守るんだなあと驚いた。

「和）他の『刹那』のやつらも呼んできますね！」

そおいうと、和は走って出て行った。

「和）つれてきましたよお！」

しばらくすると、和が息を切らして戻ってきた。後ろには『刹那』のやつらがいる。

「洵）へえ．．ほんとにいるじゃん。」

「葵）だね！」

「慎）淋！洵！葵！」

「淋）お、慎！慎も高校ここだったのか？」

「慎」ああ、言ってなかったっけ？」

「葵」聞いてないし！」

「慎」そうだったっけか？ ごめんごめん！」

ガラッ・・

オレらが話している最中にドアが開いた。

「オイ！てめえ>狼くだろ？1人で今すぐ体育館裏に来い！」

そおいつて入ってきた男は出て行った。

「慎」今のつて、NO、4の『風鈴』の総長だな。」

「洵」ケンカうつてきたんじゃねえの？」

「淋」だろうな。行くわ。」

「葵」行つてらあゝ！」

体育館裏につくと、『風鈴』のやつらが全員そろっていた。

「いくら>狼くでもNO、4でこの人数相手じゃあ、終わりだな！」

『風鈴』の総長らしき男が笑いながらそお言った。

「淋」は？オレをなめんなよ？このぐらい、余裕だし。」

「調子にのつてんじゃねえよー！」

ケンカが始まった。

鈍い音と、うめき声が響く。

シュッ

『風鈴』のやつがカッターを持っていたらしく、オレの頬をかすった。
頬から血が流れる。

「淋）てめえ！　ぶつ殺す！！」

約30分後、オレが圧勝した。

頬に傷がつき、血が流れた事でオレはキレて『風鈴』は全員死にかけた。

「淋）てめえら！オレら『刹那』のことばらしたらどうなるかわかってんだろ？　ばらしたら次はこんなじゃすまさねえぜ？」

オレは死にかけの『風鈴』に脅しをいれておいた。

ここは不良校だしばれたらケンカうられまくりだろおからな。

ガラッ・・

「葵）淋、おかえりい！淋にしては長かったね！　あ！その頬の傷どうしたの??」

「淋）カッターでやられた。」

「葵）カッター！？卑怯だなあ！　淋の頬に傷つけるとかマジム力つくう。そいつどこにいののお？殺したる！」

「淋）いや、まあほとんど死にかけだから。」

「葵）さっすがあ、淋！」

「洵）ていうか、殺したらサツに捕まるってえの；」

「慎）つか、淋。『風鈴』何人くらいそろってたんだ？」

「淋）ん、たぶん全員。」

「「「全員！？！」「」」

オレがそお言うのと、オレ以外の『刹那』全員が声をそろえてオレに聞き返してきた。

「淋）うわ！　びつくりしたあ。何だよイキナリ？？」

「洵）淋、全員いたのか？？」

「淋）ああ？そおだつて言ってるだろ。」

「葵）『風鈴』って確か80人くらいいたよね？？」

「慎）おう。」

「葵）り、淋。また力　上がったね；」

「淋）ん？そうかあ？　つか、『風鈴』くらいならお前らもいけるだろ？」

「「「ムリ！！」「」」

オレ以外の『刹那』全員が一斉に首を横に振ってそお言った。

「淋）つか、屋上行つて来る。」

「葵）じゃあ、アタシも行こつと！」

「洵）俺は慎にこの高校について聞いとくわ。」

オレは葵と2人で屋上に向かった。

カギはかかっていなかった。

ガチャ・・

屋上には誰もいなかった。

オレが寝転がると葵もオレの横に寝転がった。

「葵）ねえ、淋。突然だけど淋は、気になる人とか好きな人いないの？」

「淋」はあ？イキナリ何だよ？んなもん、いねえし。いるわけねえじゃん。」

「葵」いないんだあ……。作らないの？」

「淋」作るも何も、そんなやついねえし。」

「葵」そっかあ。。アタシはさあ、好きな人っていうか、恋人とかそんな関係の人がほしいな。欲求不満とかじゃなくて、たださ、いつも一緒にいられて信じ合える人がいてほしいんだ。もう1度あのころみたいに……。竜……。」

葵はそお言つと空を見上げた。

きつと葵はあいつとのあのころを思い出しているんだろう。

葵の元カレの、空草 竜ソングサリュウと付き合っていたころを。。

葵と竜は中学2年のときに付き合い始めた。

葵は入学してすぐに竜を好きになった。

見かけたときに一目惚れしたらしい。

でも葵は自分の気持ちをなかなかつたえられなくて2年生になった2年になってしばらくたつたある日、葵は竜に呼び出され告白されたいらしい。葵はもちろん即答でOkをした。

葵と竜はすぐラブラブだった。

クラスが違ったけど、休み時間になるたびにろうかでイチャイチャしてた。放課後は2人でいつもどこかへ出かけてた。どこへ行くにも、何をするにも2人は一緒だった。誰かが入れる隙なんてこれっぽっちも無かった。2人に秘密ごとはなく、どんな悩みでも話し合っていたらしい。でも、葵は1つだけ大きな隠し事があった。それは『刹那』の幹部だということ。

『刹那』は中学1年のときにオレと葵と洵が結成させそしてすぐに

世界NO.1になった。だから、中学は普通の学校に通っていたオレらにとって、『刹那』はとても大きな秘密となっていた。

それなりに大切な友達はいて、その友達を失いはしたくなかったから。

葵は悩みに悩んで『刹那』をやめる事を決心した。オレらは引き止めなかった。葵が『刹那』からいなくなる事は、とても寂しいけど、オレらも葵のことは応援してたし、2人の関係を崩したくは無かった。2人のとても幸せそうな姿を見るだけでこっちも幸せな気分になれたから。

葵が『刹那』をやめて5日がたったある日、ある事が起こってしまったんだ・・・。

竜は当時生徒会副会長をしてた。あの日は生徒会があり竜は葵に、遅くなるから先に帰ってと言って生徒会室に向かった。葵は少し教室で竜を待ったけど、帰る事にした。葵が帰っていると前から数人の不良が来た。

ちようどそのころ、思っていたよりもずいぶんと仕事は少なく、責任感がある生徒会長は竜に氣を使って1人でできるからと、竜を帰らせた。竜は葵を探して小走りで帰り道を通っていると、不良に絡まれている葵を見つけた。竜は葵に声をかけようとしたとき、聞いてしまったんだ。葵に絡んでいる不良が葵に向けて言った一言を。

「てめえ『刹那』の幹部だろ？」

”『刹那』の幹部”

当時、中学では不良界での話でもちきりで、なぜか皆 世界NO.1の族が『刹那』だという事を知っていた。

だからもちろん、竜も『刹那』のことは知っていた。

「葵・・・もうやめたし。」

葵はそお言っただけぞいつらは殴りかかってきたんだ。だから葵は仕方なくそいつらを殴った。倒れこむ不良。

竜はその光景を信じられないという感じで見ていた。

「竜・・・葵・・・。」

竜が小さな声で葵に呼びかけた。

後ろに竜がいた事に気づいていなかった葵は、とても驚いた表情で後ろに振り返る。

同様に隠せずにいる葵に対して何かを言おうと口を開いた竜。葵は耐え切れず、竜が言おうとした言葉を聞かずに走り出した。

「竜）葵！」

後ろから葵を呼ぶ竜。

葵は無視して走り続けた。

涙を流しながら・・・

その次の日から葵は学校へは行かなくなった。行けなかったんだ。

竜に何か言われるのが怖かったから。

葵の携帯には竜からのメールがたくさん届いていた。

” 会って話したい。”

この一言が決まってメールの文に入っていた。でも、葵は無視し続けた。

竜が葵の家に訪ねてきたことも何度かあった。それでも、葵は無視した。

オレと洵はこの光景を見てられなかったから、竜を呼び出して話をしたんだ。

そしてオレらは竜に真実を伝えたんだ。

確かに葵は『刹那』の幹部をしていたということ、でも竜を思っ
て『刹那』をやめたということ を。

竜は黙ってうなずいていた。

そして、明日公園で待ち合わせをしたんだ。葵と竜が話しをつくれるように。

「淋）あ、それとついでに言っとくけど、オレらも『刹那』なんだよね。オレが総長で洵が副総長。このことは秘密な。」

そお言うつと、竜は驚きを隠せないって感じだった。そんな竜を残して、オレらは家に帰った。

。次の日。

昼になる少し前にオレと洵は葵の家に向かった。

オレらは勝手に家に入った。まあ、いつものことだけど。

葵の部屋に入ると、葵はベッドに座ってぼーっとしてた。声をかけても葵は黙ったままだ。そんな葵を無理やりつれていくオレら。何も言わずに下を向いてただオレらに引つ張られる葵。

公園につくと、竜はもお来ていた。竜はオレらに気づいてこっちを見る。葵は下を見ているのでまだ気づいていない。

竜が呼ぶと、葵は竜を見た。驚きが隠せない様子。

「竜」話しがあるんだ。」

黙って聞いている葵。

オレらは帰ろうと思ったけど、やっぱ気になるし・・・木の陰からそつと2人の会話をそつと聞いてたんだ。

すると、竜はこう言ってたんだ。

「竜」葵・・・俺、葵が『刹那』をやっていたって聞いてすごく驚いた。昨日、淋と洵に本当の事聞いたんだ。俺・・・葵が『刹那』やっててもいいから、今までどおり一緒にいてほしいんだ。俺は葵のこと嫌いになんてなってない。俺は、今でも葵のことが好きだ。」

葵は竜の言葉を聞いて泣き崩れた。そして、何度も何度も

”ありがとう”

と、言っていた。

オレと洵は葵と竜ところへ向かった。そして、一緒に喜び合った。

そのあと、竜は葵に『刹那』を続けるように言った。そして、でも俺も入るから とオレらに言ってきた。

竜が『刹那』に入って1週間がたったある日、NO、6・7・8の族が一緒になってオレらのたまり場にきたんだ。弱いから力的には全然大丈夫だったんだけど、あまりにも人数が多すぎて少し手間取ったんだ。

竜はケンカなんか全然したこと無かったからすごくやられてた。葵

が竜のそこに向かったけど人数が多すぎて竜のところに中々いけなかったんだ。葵がマジグレしてどんどん倒していった。それにあせったのか、竜の周りにいた1人がカッターを出したんだ。そして・、竜を刺したんだ。

葵はその光景を見て止まったんだ。放心状態になってた。

竜の腹からはどんどん血が出てた。

やつとのものでオレらはNO.6・7・8を倒したんだ。そして、竜のところに駆け寄ると、竜は腹を抑えて倒れていた。腹からはどんどん血が出てて竜の周りにはものすごく血が流れてた。葵が竜のところに駆け寄ると竜はしゃべりだした。

「竜」あ・・葵、俺はも、もう死ぬと思う・・。自分の事ぐらい、自分でわ、かる。葵、葵は何でもか、んでも、自分で背負いこむから、言つとく。あ、おい？俺がもし、死んでも、葵のせいじゃ、ないし、葵の責任で、もないから、気を病まないでほし、い・・。

ー

竜の話が1段落したところで洵がよんだ救急車がきた。

竜はすぐさま、救急治療室に運ばれた。

医者は竜を見てもお助からないという事をオレらに言ってきた。あまりにも血が出すぎていたかららしい。だから医者は最後に話をしてもいいと、オレらを治療室に入れてくれた。

「葵」り、竜・・。」

葵が泣きじゃくりながら竜に話しかける。

「竜」あおい・・。そおか・・。や、やつぱり、俺はし、死ぬのか・・。葵、今まであり、が、とうな。ずっと好きだ、った。入

学したと、きから好、きだったよ、あ、おい。葵？あお、いは背負い込みや、すいから言、う。俺、が死んでも幸せになつてほしい。俺が死、んだあと、気をつかわないで、誰かと幸せに、なつてほし、い。頼む。それ、に、『刹那』もずっと、続け、てほしい。頼む、よ・・あ、おい。」

「葵」りゅう・・。」

そして葵と竜はキスを交わした。

「竜」あおい……。幸せにな、ってくれ、よ。約束だ、よ？あ、おい……。」

そして竜は死んだ。

そのあとの葵は、まるで抜け殻のようだった。最初のころはオレらが話しかけてもまるで反応が無かった。

でも時間がたつにつれて少しずつ、ほんと少しずつだけど、少しずつでも確実に葵は戻ってきた。

そして今ではほとんど普通の葵にもどっている。

それでも、たまに葵はとても寂しそうな表情をする。

そんな表情のときは必ず葵は竜のことを思い出しているんだ。

オレらは葵に無理やり竜のことを忘れさそうとは絶対決してしない。そんなことをすれば、逆に葵が壊れてしまうから。

葵は竜との約束を守ろうとしているんだ。

葵を見ると、空を見ている葵の瞳からは涙が流れていた。

「淋」葵……。も、もしそんな人が現れたら、作ろうかなあ……。なんて……。」

「葵」ホント？！約束ね！」

葵は涙を拭いて言った。

「……この空気を換えようと言ったら、約束してしまった……」

まあ、そんなやつ現れないだろうし、いつか。

そしてオレらは教室へ向かった。

。次の日。

オレらのクラス1組に転入生が来るらしい。

「今日は、転入生がいます。入ってきてください。」

ガラ・・

「悠」秋元 悠^{アキモトユウ}や。よろしゅう!」

関西弁か・・。おもしろい!

悠はオレの前の席に座った。

「淋」な!オレ森咲 淋。よろしく!淋ってよんで!」

「悠」おう!よろしゅう、淋!俺のことは悠ってよんでな。ほんで、1つ聞くけどなんで女やのに オレ って言ってるのん?」

「淋」ま、別にいいじゃん!」

「悠」せやな。」

「葵」淋、自分から話しかけるなんてめずらしいね。どうしたの?」

「洵」どうしたんだ?」

葵と洵がオレに言ってきた。

「淋」イヤ、関西弁っておもしろいじゃん?」

「悠」淋、この人ら誰なん?」

「葵」アタシは淋の親友の空野 葵。葵ってよんでね!」

「洵」俺も淋の親友で香原 洵。洵ってよんでな。」

「悠」葵に、洵か。よろしゅう!俺のことは悠ってよんでな!」

そのあと、オレらと悠は仲良くなって大体はいつも4人で行動する

ようになった。

信頼できて楽しいダチになった。

オレは信頼できるダチには『刹那』のことは話すようにしてる。

ずっと前に『刹那』のことを話してオレらから離れていったやつはいた・・・でもオレは話すようにしてる。

だって、長い間一緒にいて、ダチとして隣にいたくちやいけない存在になったとき、『刹那』の事を話して、もしもオレらから離れていってしまったら辛過ぎるから・・・

悲しくて切なくて立ち直れなくなるから・・・

付き合いが短い方が、離れてしまったとき、まだ耐えられるから。

だからオレは話すんだ。

あとになって、ああ、あのとき話しておけばよかった　って後悔するのはいやだから。

大きな苦しみを背負うのはオレには無理だから。

でも、オレはなぜか悠に『刹那』の事を話せないでいた。

なぜか・・・なぜか分からないけど、悠には知られたくないって思った。

なんでかな・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2529e/>

× 不良少女の恋 ×

2010年12月3日14時36分発行